

「永遠の神のご計画」エペソ3章8-13節

今日から再びエペソ人への手紙の講解説教に戻りたいと思いますが、最初に簡単に前回の説教の3章1節から7節のパウロの言葉を振り返る時をもちたいと思います。パウロは最初に3章の1節で、自分が現在置かれているローマでの囚人としての立場を重ねて、「私パウロはキリスト・イエスの囚人となっています。」と語っています。自分は時の権力者であるローマ皇帝の囚人ではなくキリスト・イエスの囚人であるとはまことにパウロらしい言い方ではないかと思えます。ここにキリストを愛してやまないパウロの姿を見ることができると思えます。パウロはここで、自分のうちになされしイエス・キリストによる救いを思い返しながらか、自分が「神の恵みの務め」によって異邦人に福音を伝える使徒として神によって召されたというのであります。パウロが宣教を始めた当初は異邦人の救いは当然のことではありませんでした。ところがキリスト・イエスにあって異邦人もその救いにあずかることができるようになったのです。そしてパウロはその異邦人にキリストの福音を宣べ伝える使徒として召されたのであります。そしてその通り、このパウロの働きによってキリストの救いが私たち異邦人にももたらされ、地の果てとも言える日本にまでこの福音が伝えられ、私たちはその救いに与ることができるようになったのでした。

そしてそれは11節で語られているように「神が主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた永遠のご計画」によるのです。その計画は最初から全人類の救いにあつたのです。パウロには自分がその福音に仕える者とされたという確信がありました。そしてそれはとても光栄なことでありました。しかしそれは、パウロは7節で、自分の力でそうになったのではなく神の力の働きによって、神さまが私を福音に仕える者にして下さったのだと言うのです。何故ならパウロはすべての聖徒たちのうちで最も小さい者であるからだと言うのです。これは何という謙^{へん}りでしょうか。それはパウロが自分の罪深さを誰よりもよく知っており、自分が神の恵みの賜物、救いを受けるにふさわしくない者であることを知っていたからです。それはパウロがかつて神の教会を迫害していたからでした。パウロは自分が神の恵みを受けるにふさわしくない者、救われるにふさわしくない者、ましてや使徒として呼ばれるにふさわしくない者であることを誰よりも良く知っていたのです。だから神の力が働いて神の恵みの賜物によらなければ到底、このような使命を与えられる訳がないことを知っていたのです。パウロはこの手紙を書く数年前にコリント人への手紙第Iの15章9節で「私は使徒の中では最も小さい者である」と自分が使徒の中で最も小さい者であることを告白していました。しかし今は、「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私」として、使徒団の雛壇はおろか、広く全キリスト教徒の中で最も小さい者であると語っているのです。これはパウロが単に自分が教会の迫害者であつたという前歴のゆえだけでなく、彼が自分の罪深さ、無価値さを自覚してのことであつたと思われまふ。そしてこのような自己評価は彼が聖なる神の前に立つ時に初めて知り得た宗教的な自覚であり、更に彼が自分に与えられた過分な恵みを知れば知るほどいよいよ深められていったものでした。そしてパウロは死ぬ直前に書かれたと言われるテモテへの手紙第Iの1章15節で「わたしは罪人のかしらです。」と語っています。これは「すべての聖徒の中で最も小さい者である」と言う別の表現です。もちろん、人間的な見方からすれば、パウロが罪人のかしらであるなどということは考えられないことでもあります。実際にパウロよりも罪深い者はいくらでもいたでしょう。それどころかパウロほど正しい人は滅多にはいませんでした。パウロは神の律法を厳守するパリサイ派の律法学者として「律法による義については何ら非難されることのない者でした。」(ピリピ3:6)と自分で語つ

ているからです。このようにパウロは年をとると共に、いや信仰生活が長くなればなるほどに自分の罪意識が益々深まっていったのです。これこそクリスチャンの正しい年の取り方なのです。神は自信に満ちた人に大きな仕事を託すことはなさいません。また自分は駄目だと思っている人も同じです。神は神の前に出たために、神に出会ったために、いや神の恵みを受けたので、自分は貧しいことを知ったという者にこそ、その尊い神の使命を委ねられるのであります。ですから、神によって砕かれ、謙遜にされるのは神に捕えられることであり、神のお仕事のために用いられることになるのです。そして確かに神はこのように謙遜な人を用いるのです。パウロは8節で異邦人に福音を伝えることは「キリストの測り知れない富を福音として伝えることである。」と語っています。パウロはこの時、確かにローマで囚人として牢屋の中からこの手紙を書いているのです。しかしそこには囚人としての暗さや敗北感やうらみがましいことは一つもありません。むしろここには勝利者パウロの姿があります。

13節の「ですから」とは「パウロが異邦人伝道の使徒としての務めを与えられた者である」ということを受けています。だからパウロは「私があなたがたのために苦難にあっていることで、落胆することのないようにお願いします。」と語ります。誰しもが国家権力によって捕まり、牢屋に入れられるということだけで動揺するものです。福音に仕える者となったパウロは当然「福音に仕える者」としてのしもべらしい生活をしてきました。そして、その生活の特徴は苦難でありました。確かに、パウロの伝道者としての人生が苦難に満ちていたことは良く知られていることでありました。ちょうどイエス・キリストの十字架という苦難によって神のご計画が実現したように、福音を伝える者が苦難を経験することを通して、神の世界宣教の計画は進んで行くのです。だからこそ、パウロはここで「私が受けている苦難のゆえに意気消沈してはいけません。」と語っているのです。それは私たちの信じている神は恵みと力と福音を与えて下さると共に苦難をも与えられる方であるからです。そして、その苦難を通して、その苦難の中で、誰にも想像できない方法で神はご自分の宣教の御業を進められるからです。このことはいつの時代においても、どこの国においても同じであります。今日の時代も人類は100年に一度あるかないかと言われるコロナ禍のパンデミックの試練の中を通されています。しかし神はこのコロナ禍の試練の中で、あたかも教会のあらゆる宣教の働きや牧会の働きがストップさせられているかのように見える状況の中でも、あらゆる方法を用いて着実に宣教の御業を進めて下さっているのです。しかしエペソの教会のクリスチャンの中には神のために働くしもべがどうして苦しみを受けなければならないのかと考え、落胆していた者たちがいたようです。だからこそパウロは「私が苦難にあっていることで、落胆することのないようにお願いします。」と語るのです。それはパウロが彼に恵みと力と福音を与えて下さった神が、彼の苦難を通してご自分の宣教の計画を進めておられることを知っていたからです。そして、そのパウロの苦難の目的の一つは、異邦人に神の祝福、神の救いが及ぶためだからです。私たちが苦難や試練にあうことは、私たちが神の救いを一層よく知り、神とさらに深く交わるためなのであります。ですから私たちはいつの時代も教会を通して、また数々の試練を通して、神がどのようなことをなさろうとしておられるのか、その神の御心を聞こうとする心の耳が必要なのです。何故なら、私たちは苦難や試練に直面しますとすぐに神に対して不信仰になり、愚痴や不満を、うらみ、つらみを言いたくなるからです。しかしパウロは苦難の中でもこのような言葉を一言も発していません。そればかりかこの苦難こそはあなたがたに対する神の愛の偉大さを証しするものであり、あなたがたの栄光なのだと語ります。私たちはこのコロナ禍の辛い試練の年を終えるにあたり、どのような試練や苦難の中でも神の永遠の救いのご計画は着実に進んでいくという慰め、励ましを覚えたいと思うのです。それはどんな試練の中でも神は私たちと共にいて下さるからです。